



嬉泉の新聞 第64号 2008年(平成20年)4月発行(年3回発行)

発行所=社会福祉法人嬉泉

東京都世田谷区船橋1-30-9(〒156-0055) TEL 03-3426-2323

<http://www.kisenfukushi.com> E-mail:kisenfukushi.com

発行人=石井哲夫

編集人=友田 篤

ひどい施設の話

日本自閉症協会 常務理事 大平 薫

私は30数年間公務員として勤務させていただきましたが、そのほとんどは厚生労働省において児童福祉と障害福祉の分野の仕事に携わってきました。また、国立の児童自立支援施設と知的障害児施設での勤務も経験し、利用者とも直接接する機会にも恵まれました。特に知的障害児施設での経験は私の障害福祉に対する考え方をええさせられました。施設での勤務のあとの多くの期間は、児童福祉監査官・障害福祉監査官として全国の民間の児童福祉施設(主に保育所、児童養護施設)と知的障害者更生施設を訪問しました。指導監査にあたって私が一番重点をおいたことは、利用者の為の施設になっているかどうかでした。特に知的障害者更生施設については、各施設とも施設長はじめ指導員、保育士の協力のもと利用者のために与えられた環境の中で必死に努力しておられましたが、それでも当然各施設によって利用者処遇に対する取組みに差があることを知りました。その差は、各施設長の施設運営に対する姿勢によって大きく異なっていたように思われました。

その中でも特に驚きを禁じえなかった施設の一つに知的障害者更生施設や授産施設等を運営している東北地方の社会福祉法人がありました。その法人の設立母体は、その地域の町村でした。更生施設には相当数の重度の利用者を入所させていました。入所施設であり24時間指導員、保育士の配置が必要と思わ

れました。当然、指導員、保育士の勤務体制は交替制勤務が妥当と考えましたが、早番・遅番勤務もない日直勤務だけの体制であり、朝夕の一番忙しい時間帯は宿直の指導員、保育士と調理関係の職員が利用者への対応をしているとのことでした。また、土曜日の午後から日曜日にかけての勤務もすべて、宿直体制でした。これで、果たしてどのような処遇ができるのでしょうか。ただ、施設に入所させているだけの状態にしか思えませんでした。しかも、資格のない職員が数多くおりました。この法人は財政的には信じられない程の剰余金等をかかえて剰余金の処理にも困っていたようでした。

また、指導員、保育士等の勤務体制について確認したところ、3ヶ月間早番、遅番の勤務体制を組んで実施したが、職員から帰宅に危険を伴うとのことで中止になってしまったとのことでした。私は呆気にとられてしまいました。最後に指導関係の責任者に「この施設は、利用者のための施設ではなく、職員のための施設ですね?」と尋ねたところ、なんと「はい、そうです。」との答えがかえってきたのには驚きました。講評では、理事長、施設長はじめ職員の皆様に対して、「とにかく、利用者のための施設にして下さい。」とお願いし施設を後にしました。あれから10数年今はどんな施設になっているのでしょうか。

社会福祉援助論

石井 哲夫

— その27 —

社会福祉最前線からの訴え その三
ー福祉現場と行政を結ぶ絆が欲しいー

今、冷気に覆われている社会福祉界である。このような社会福祉の冷気は、社会福祉界を良く知らない者たちの実験的な発案によって起こされていることを知っているだけに、多くの為政者達によく現場の意見を聞いて考えてもらいたい。そして献身的な支援現場の人の善意を踏みにじらないで欲しい。このような状況を意識しないかのごとく、ひたすら希望を持って、支援に励んでいる人々を大事にして欲しい。

この期に及んで思うことは、政治、行政関係者が、社会福祉現場を代表する意見を誰から聞くかは極めて重要ということである。長年、厚生労働省の審議会委員を務

めていて、関係行政の人たちの情報収集の努力を知ってきただけに、最近の委員会の記録を読んで、社会福祉現場を知らない人の意見が強くなっていることを感じている。私が年を取るにつれて年々増えてきている仕事仲間は広い年齢層に渡ってきているが、おおむね、現場に密着している人は、あまり外に向けて発言したがない。私などが時たま、こういう人がいるということを知り合いの行政の人に話すと、そういう人が行政によって委員に起用されていくのを知り、積極的に情報提供していこうと思っている。

それにしても何故、行政は現場のことを知らない人の意見を重用しているのだろうか。何人かの知り合いの行政の人から聞いてみると、行政の人たちの仕事が膨大

で、毎日労働基準法もあつたものでなく身を削って仕事をしているので、現場になかなか行けないという。総てがそうではないらしく、有能な人ほどそのような状況に置かれていないらしい。

行政の効率化と意志決定の適切化を図る行政組織の構造改革こそ着手して欲しいと思ってしまう。

長い間、自閉症への適切な政策を進めて欲しいと思いながら、梨のつぶてのような情報提供を繰り返し繰り返し行っていたいかなければならなかった。しかし今は、以下のような事実を持って訴えたい。

A君が親から叱られて、パニックを起こし、親に向かって包丁を向けた。本人には、刃物を人に向けることの犯罪的な意味を意識できないと言うより、他愛なくもテレビのシーンからの模倣をやってしまったという感じである。しかしこれは他愛ないと言うことでは済まない自己抑制のなさが問題なので、後で、本人は、警察の関与によって、自分がしてはならないことをしてしまったという自責の思いを示すのであるが、パニック

時には、衝動の虜になって自己統制が出来なくなっていることが顕在化されたのであった。

高機能発達障害の人生に生じている様々な障害に対して苦悩している当事者と、社会の立場で気遣ったり改善を求めてきた親によって、家庭内トラブルを多発させてしまっている状況にも専門的に（家族療法等で）関わっていかねばならない。

社会の相談療育援助体制を強化するために発達障害の専門性を極めたい。そして行政に提言して必要な施策を推進していきたい。その為には、厚生労働行政、教育行政、司法行政の連携を強め発達障害の医療・福祉・教育現場を支援していく政策を求めたい。相談現場で、社会の突出した問題に発達障害が関与している実情を知ることが出来るようになったことから、本人の立場でないと分からないその生きにくい障害の実態を政界・行政に知らせていくことが大切であるということを考えさせられている。

私たちの世田谷からの発信

「宇奈根なごやか園で育つ」

永見小夜子

明るい陽射しが溢れる園庭で、大縄を回し縄跳びをする年長の子どもたち、多摩川の土手に散歩に行こうと門のところに集まるグループ、砂場で砂をせっせと器に入れている子、砂場の枠にすわって保育士とおしゃべりする子どもたち、テラスの陽だまりで絵本を読む子、それぞれが好きなところで思いのままに遊びます。それがなごやか園の朝の風景です。そして厨房から昼餉の匂いが立ち込める頃、子どもたちはおもちゃを片付けて食事の準備を始めます。ここは大きな家族の家。のどかでゆったりとした時間が流れます。

宇奈根なごやか園は、昨年の七月に開園した木造で定員八〇名の認可保育所です。自然が多い環境

で遊び、毎日本の香りに包まれ過ぎていきます。子どもの育つ環境としては最適な空間です。保育参観や面談、親子のふれあい遊びなどを通して保護者の方々との交流も深まっています。

保育所保育指針が改訂され、告示されました。そこに示されているように、子どもの生活環境、保護者の子育て環境の変化などにより子育てが難しくなってきた昨今、保育所に期待される役割は多大了。質の高い養護や教育の機能を求められています。当園においても、実際の子どもの遊びや生活の姿を捉え、子どもの視点に立って、保育指針を基に保育計画を練り、保育の内容を充実させていきたいと考えています。保育指針の示す意図を表面的な言葉だけでなく、その深い意味を具体的に捉えて日常の保育に展開し、充実

した研修と自己研鑽を積み、質の高い保育を目指したいと思っています。木の葉の間から椿の蕾を次々見つけて小躍りして喜ぶ子、ポケットいっぱい詰め込んだ黒い実をそっとつまみ出して見せる子。そんな子どもたちの感性を大切にし、表現する力を引き出し、大人の価値観や枠を押し付けることなく、子どもの育とうとする力を見守りたいと思います。子どもの生活からの学びを大切にすると、遊びの中から子どもの発見や興味、探究心を育てる教育の一体化を図ります。そして、子どもが社会の中で、人として認められ自信を持って育つことができるようにと願っています。

子どもをめぐる心痛む事件が連日のように報道されています。親たちが安心して子育てができるように、そして、子どもたちがのびのびと自分らしさを見失わないように育つ環境をつくり、いのちを大切にすると社会を築いていくことは、私たち保育者の大きな課題です。宇奈根なごやか園は、親子広場などの活動を通して地域の子ど

もや母親、地域の住民との交流を深め、子育て支援の拠点になるような働きをしていきたいと考えています。

今日もいつもと同じように、二階の窓に向かって何度も手を振るお母さん、姿が見えなくなるまで手を振る子、「いってきます」「いってらっしゃい」の声が行きかいます。私は、自転車をこぐ親を見送り、自分の子育て時代を思い出し、いつも心の中で応援します。『若い親たちよ、仕事と子育て、がんばれ!』と。そして、今日も一日子どもたちが元気にあそび、無事に過ごせるよう祈ります。

(宇奈根なごやか園 園長)



私たちの じぶんと 赤塚からの発信

『豊かな生活を目指して』

植野 裕子

赤塚福祉園では『目的別外出』という企画を実施しています。日常活動では行けない様々な場所を利用者自身が考えて、在園時間内に少人数で出かけるというものです。

私の所属する更生1グループは車椅子を使用している方がほとんどです。利用者が目的地（食事場所なども）・移動手段・時間配分を考え、その計画を実行する経験はほとんどないので、『目的別外出』は大切な機会です。

計画段階ではガイドブックやインターネットなどで調べます。しかし園の最寄駅から目的地の最寄駅までの時間は調べても、実際に数字として出てこない、駅までの移動時間や切符を購入する時間な

どは考えない方が多いのです。

支援員からすると『もう少しゆとりを持った方がいいのに』『そんなに遠くに行くとは時間的に厳しいな』など思うようなこともありませんが、そこはグッとこらえて見守ります。私達が日常当たり前に経験する『失敗する経験』も、皆さんはその機会すらないからです。

そして『現地での買い物と昼食』の予定が、移動に時間がかかり結局『昼食』のみで帰ってきた時、『やっぱり〇〇は遠かったなあ』『乗り換えは時間がかかった』などの感想が出ると、経験は知識に勝るのだと痛感します。このような経験を積み重ねることで生きた知識も増え、豊かな生活につながると思っています。

また目的別外出は利用者のためだけでなく、社会のバリアフリーの向上や、アクシデントに柔軟に対応することで職員の経験も増え

る大変貴重な機会です。

駅のエレベーターが定期点検のため停止していた時は、駅員さんに声をかけました。すると4名の駅員さんが職員と一緒に3台の車椅子を地下1階まで下ろしてくれました。また電車とホームの間に補助板を渡してくれることもほとんどの鉄道会社でみられ、駅員さんたちが車椅子の利用に慣れてきたことを感じます。しかしまだ、『バリアフリー』は十分ではないことも多いのです。

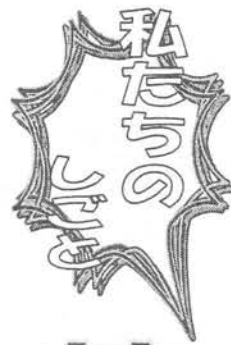
食事の形態を全てトロトロの初期食状態にする方の外出では、『車椅子利用可』と記述があったレストランに予約したものの、食卓でのミルサー使用は（ミルサーの音が）他のお客さんに迷惑がかかる」という理由で許可が下りませんでした。そこで、ミルサーを持参して再度お願いすると「この程度ならいいですよ」と簡単に許可が下りました。

また電車が人身事故で緊急停車するというアクシデントに遭遇しました。同行した職員によると、車内アナウンスの説明や指示に従ったものの不明瞭で、周囲の乗客が先に移動を始めて状況を把握した

ようでした。結果的に電車内を移動して最寄駅のホームまで避難できたのですが、車両連結部分の金属板は狭く、車椅子がやっと通れるほだったとのこと。万が一線路においての避難となれば、周囲の乗客にも協力を求めなくては避難できません。一般的なバリアフリーという言葉と現実とのずれはまだあるなあ、と思われました。私も一般社会の一員として、また障害者支援に関わる一員としてこの目的別外出を大切にしていきたいと思っています。

（デイセンターきらら職員）





袖ヶ浦からの発信

「学齢児の支援を通して」

大友 彰

袖ヶ浦のびろ学園は現在三十五名の方が入所しています。その中で、私が所属するあやめグループでは学齢期の方二十一名が在籍しています。それに加えて、短期入所を利用していても、毎週数名いらっしゃる。

一日の日課は、日中は学校に登校したり、訪問学級を利用し国語や音楽など様々な授業を受けています。その他の時間は学園で過ごしており、施設での支援の内容は、衣食住を通じて共に生活していく事が主体となります。

入所を希望される方は多く、保護者の事情、学校の先生に理解されず、不登校になってしまったなど入所した経緯は様々ですが、自閉症というハンディを抱えた彼らがいかに自分らしく伸び伸びと生

活していけるか、一人一人の特性に応じて考えていくのが私たちの使命であると考えています。

実際に、子ども達と関わっていると、甘えたい気持ちからつい叩いてしまう子、自分で決めたルールを忠実に守ろうとして、物事にこだわって日課がなかなか進まない子もいますが、子ども達みんなに必ず愛らしい一面が垣間見えることがあります。たとえば甘えたい時について叩いてしまう子には、「甘えたい時は、人を叩いて表現するのではなく、ニコニコしながら近づいたり、抱っこしてもらおうように求めると、他の人にも誤解されずに受け入れてもらえる」とことを伝えてやり取りをしていくと、人を叩く事が激減し、ニコニコしながらイキイキと過ごせる時間が多くなっています。それまで「叩いてしまう子」という認識から「ニコニコしながら甘えてくる子」という風に、同じ「甘える」気持ちからの行動でも百八十度周囲からの見方は変わるので、子ども達が持っている可愛らしい一面をどのように引き出すかを支援する上で大切にしています。また、次のステップとしては私たちが支援した内容を保護者に伝え、子どもの新たな一面を知っていただき、子どもと関わって楽しいと思える体験を積めるような橋渡しになれたらと考えています。

今後も、子どもたちの成長を支援する立場のものとして、切磋琢磨磨いていきたいと思っています。

(袖ヶ浦のびろ学園支援員

平成20年3月記)

「ひかりの新年会を終えて」

胡摩崎 誠

一月十八日(金)にかずさアカデミアパークホテル(木更津市)にて『ひかりの学園 親子合同新年会』が行われました。参加者はひかりの学園の利用者・ご家族・職員など計百二十六名の皆さんが参加されました。

内容は、石井所長の新年のご挨拶をはじめ、利用者からの新年の抱負、新人出し物などです。また、

当日は、アウトスの作品やひかりの学園の利用者の皆さんの書き初め(新年の抱負)を展示したりなど、会場内を華やかに彩りました。

新年会が始まると、会場内が「期待」と「緊張」の二つの空気に包まれていたように感じました。それは、今年度から会場がホテルになったことで、「すごいもの(食事)が出てくるのでは？」という期待と、「どのようなやり方で進められるのだろうか？」という緊張ではないでしょうか。しかし、多くの方々が期待されていた会食が始まると空気は一変。皆さん和やかな空気の中、参加者の皆さんは世間話などに花を咲かせておりました。会が進むにつれて、今までのような新年会の姿がそこにはありませんでした。

後日談になりますが、参加された皆さんから「新年会を豪華な会場(ホテル)で行えて大変良かったです。」というご意見をたくさん頂きました。

最後になりましたが、新年会開催にあたって、ご協力して頂いた皆様には感謝の言葉でいっぱいです。ありがとうございました。

(袖ヶ浦ひかりの学園支援員

平成20年3月記)

私たちの TOSCAからの発信

東京都発達障害者支援センター

東京都発達障害者支援センター
(通称トスカ)の平成十九年度の活動状況をご報告いたします。

(一) 相談支援の実施状況

相談申込件数(新規ならびに再来)は十一月末まで一、一八四件を越し、現在来所による相談は一ヶ月一ヶ月半お待ちいただく状態が続いています。

相談内容としては特に思春期以降の年齢の人の長期引きこもり、浪費、家庭内暴力による家族間の過剰緊張など、対応困難なケースが多くなっています。また緊急対応としての精神科病院への入院対応があっても、その後の受け皿がほとんどないのが実情です。

(二) 他機関との支援連携の状況

このような実情の中で、医療機関、保健所、就労支援機関、司法関係者、一部の区・市の担当者とはお互いに紹介しあう、情報の交換を行う、などの実質的な連携が進んできています。また教育分野とは、啓発・研修を中心とした連携に努めています。

(三) 発達障害者支援センター

全国連絡協議会

年一回全国の発達障害者支援センターが一堂に会して総会、実務者研修会等を開催していますが、今年度は東京都が企画・立案を担当し、東京都で開催しました。主なプログラムは以下の通りでした。

・記念講演Ⅰ

「発達障害を考える政策」
衆議院議員 野田聖子氏

・実務者研修

コメンテーター
横浜市総合リハビリセンター
副センター長 清水康夫氏
明神下診療所
所長 米田衆介氏

・記念講演Ⅱ

「発達障害者支援センターに期待すること」
目白大学教授 山崎晃資氏

・公開シンポジウム

「発達障害者の
確実な向上を目指すには」

シンポジスト
都立梅ヶ丘病院
院長 市川宏伸氏

全国自閉症者施設協議会

会長 奥野宏二氏

日本発達障害ネットワーク

代表 山岡 修氏

コメンテーター

東京都発達障害者支援センター
センター長 石井哲夫

・記念講演Ⅲ

「発達障害者支援の展開」
衆議院議員 福島 豊氏

(四) 国からの委託および補助金事業の実施状況

次の二つの事業を実施。

厚生労働省研究事業「平成十九年度障害者保健福祉事業」

① 「高機能広汎性発達障害における就労前支援プログラム開発に関する研究」
当事者への就労前支援プログラム(グループワーク)の実施とそのプログラムの実施結果を基に支援ガイドブックを作成

② 「家庭生活や社会生活に重篤な困難を有する高機能広汎性発達障害への支援方策の開発に関する試行的事業」
袖ヶ浦の施設利用における当事者の試行的就労体験の実施

・ スーパーバイザー
センター長・石井哲夫
青年期HPPDDの人の
グループセッションの実施
スーパーバイザー

ルーテル学院大学名誉教授
前田ケイ先生

★ 平成十九年度「発達障害者
就労支援者育成事業」

・ 次の三講座を実施

① 「発達障害がある人への就労支援」
対象・就労支援機関関係者

② 「働く」発達障害の人」
対象・就労支援機関関係者
事業主および企業の
人事労務関係者

③ 「障害者雇用の新しい展開」
「発達障害のある人の
雇用を考える」
対象・事業主および
企業の人事労務関係者

(五) トスカ主催の講座の開催

「発達障害のある人への理解と支援」として、次の三講座を開催しました。

① 「自閉症児と共に生きる」
「年長自閉症者の
親から学ぶ」

② 「ディスレクシアを知る」
「基礎講座と体験・当事者
発言を聞く」

③ 「発達障害がある子どもと家族
への早期支援」
(支援員 島野雅子
平成20年3月記)

嬉泉トピックス

ご案内

【アトリエ アウトス展】

20年度も玉川高島屋アート展に出展することが決まりました。

日時：平成20年6月26日(木)

7月1日(火)

会場：玉川高島屋SC本館R階

ルーフギャラリーにて

【秘伝の味】

「潮騒の詩(ふりかけ)」

袖ヶ浦ひかりの学園では昨年の5月から、ふりかけ「潮騒の詩(しおさいのうた)」と出汁醤油「万祝(まいわい)」の製造を行っています。これは、近隣の地場企業である相川醤油が製造販売していたもので、その美味しさが評判を呼び、多くの固定客が付いている程です。ところが相川醤油がこの程事業を終了することになり、

ご報告

【すこやか園・分園の開設について】

平成20年4月から世田谷区の委託を受けて、すこやか園の分園が

開設しました。場所は砧2丁目、すこやか園を中心に考えると環状8号線の道路を越えた所にあります。すこやか園の風の子グループはよくその近くの公園にいつて遊びますが、徒歩で15分から20分位の所にある新築マンションの1階にあります。立派な看板が入口に立っているのが印象的です。

分園の委託が本格的になったのは昨年の秋で、それ以降関係者で話し合い、みな意見が一致したことは、本園と分園を分離しないことと、すこやか園が従来から目指してきた『子どもの内面を理解し、それぞれの生活リズムを尊重した家庭的な雰囲気の中で保育すること』でした。今、すこやか園ではこの職員の思いを具体化する方向で着々と進んでいます。

☆すこやか園分園の概要

所在地：世田谷区砧2-16

面積：延べ床面積258㎡

施設内容：保育室2・事務室

調理配膳室・トイレ

対象年齢：3歳児(8名)

4歳児(8名)

5歳児(9名)

(前すこやか園園長 山根美江子)

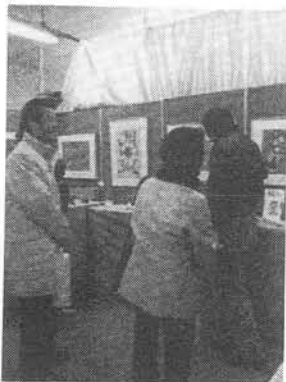
【第30回嬉泉祭バザーのご報告】

平成20年2月24日(日)に、袖ヶ浦に於いて、第30回嬉泉祭バザーを開催いたしました。

今回のバザーは、なるべく学園の建物を活用して、屋内部分の会場を増やしました。これは、寒さ対策というところで、特に食堂は屋外にテーブル席を作っても、お客様が寒くて座ってられないとの声があったからです。

当日は、風による冷え込みがきつかったものの快晴で、大勢のお客様をお迎えすることができました。特筆すべきは、袖ヶ浦市長の出口清氏にお越しいただいたことです。出口氏は、昨年新たに選出された若い市長さんで、福祉についてとても理解のある方です。この特別ゲストの来場もあって、バザーは盛況のうちに終了いたしました。

(バザー総務 石井啓)



ひかりのタイムス

独立第55号

「2泊3日のグループホーム旅行」

田中 雅也

沖縄は、古く昔外国でもあって「琉球王国」とも言っていた。

平成19年11月14日水曜日から11月16日金曜日まで、グループホームの利用者4人と世話人2人の6人で沖縄へ往復旅客機で行った。沖縄は鉄道は、昔はなく、JRは今のまま。モノレールがなは空港から首里まである。

沖縄へ行く前は、飛行機に乗る時間が長いと水が飲めない、温泉共同浴場がないからやめようかと迷ったけど支援員の話だと「きこえない迷うのも絶対面白く楽しくなるはず」だと教えてもらったから行くことにした。

2日目のよる僕の希望通り、ひかりの副園長、指導主任の親友夫婦、沖縄県本島地元の人と面会で

きた。

この1人親友は彼の大学時代の同級生であって、僕は、まとも、まじめ、優しい話しやすい、いろいろわかってくれるから気に入った。ほかは1日目の首里城公園こは、昔は王様中華人民共和国からの留学生のお住まいでもある。

2日目は、琉球村で24年前父が行った事のある、へびのハブのパフォーマンスショーあって、ビデオでへびのパフォーマンスとマンガの戦いでどちらか片方を食べようとして、引き分けになった。薬剤師の説明、ハブのお茶飲むと「じょうぶになります」と言われ教えてもらって、ハブのお茶ごちそうになったのと、民ようおどりとコンパニオンひげはやした男の人が、かい説したりして、聞かせてもらったり、音楽聞かせてもらったのと、2日目の海軍の基地と3日目の平和記念公園は、戦争博物館で第2次世界大戦の生活の展示

と海軍基地は戦争中のかくれがに、なっていた事がわかった。ハブのショーの薬剤師さんは、ハブのお茶も「ハブの粉は、薬になる」と言っていてこれは、良かった。

ほか良かった事は、副園長指導主任の親友は、まとも、優しい、話しやすい、この人から沖縄のアメをもらった。この人に会って、面会でできたのと僕の希望通り帰りのなは羽田の全日空の旅客機の中では、音楽家演奏者グループ団体ともいたのと助すけ船あった人いた。

乗客は、スチュワーデスと話してこの人達みんな優しくかった。これも面白かった。2日目琉球はハブのショーとコンパニオンボーイのひげのはやしている男の人と女の人達からおどりをおどらせてもらった。これも良かった。沖縄のなは市は昔の古い町でもある。ほかに沖縄は、今だに、暑くて気持ち良かった。ほかに沖縄旅行は、元昭和50年、32年前海洋博のあと、地記念公園は、水族館になっていて、その魚類イルカは、ショーをやるコンパニオンボーイが見せて、りこうな動物だ、ほか磯ぎんちゃんも、ひとでも、うにも、死んでいるのか、いきて

いるのかわからない、からの中閉じこもりの貝サザエみんな死んでいるみたい。こいのぼりを本物にしたみたいなサメいた。最後の平和記念公園は、戦争中亡くなった人が多いけど、多くのまご、ひ孫これからも小学生の子供生まれて6年から12年13年その多くの子供達に戦争を知ってもらうようにした展示があった。

沖縄はおいしい食べ物、沖縄そばを1日目の昼食、夕食2日目の昼食と3回食べた。

この沖縄は、ホテルには、お風呂は、客室のトイレの中にあって、日本人の社会生活に、合わない。ほか今は一ぱんでも嬉泉でも女性の運転士はやっていて、レンタカーの手續きの事ム所へ行くのに、なは空港からレンタカーの乗り場までのバスは、行きは女性が運転するのは不安だった。

今は沖縄は、昭和47年35年前に、アメリカから日本に、へんかんされて、沖縄県となって、日本語で話している人々となっている、沖縄へ行った所、パイン畑は、見なかった。さとうきび畑は、あまりなかった。見れなかった残念だ。以上。(グループホーム

春のひかり利用者)